

中学生の自己愛傾向と適応の関連 - 自己受容、精神的健康、および自尊感情の観点から -

所属校：世田谷区立弦巻中学校
氏名：宮本 幸彦
派遣先：上越教育大学大学院

キーワード：自己愛・類型化・中学生・適応

研究の目的

1 問題

(1) 最近の中学生の変化

20年前までの中学生と近年の中学生はその心理的特徴が大きく変化したように思われる。例えば、「キレる」という言葉で表現される衝動的な怒りの表出が、非行などの反社会的な行動をとる生徒だけでなく、生徒指導を必要としないごく普通の良い子と言われる生徒にも見られるようになってきている。近年の青少年の衝動的な怒りの表出は、宮下・大野(2002)においても問題視されている。また、河上(1999)も、最近の生徒はひ弱な反面、非常に頑固でわがままになったことを指摘している。さらに諏訪(1998)は、伝統的に日本の子どもがもっていた謙虚さや控え目なところがなくなったことや、教師の発言全てを受け入れるのではなく自分たちの欲望とリズムで受け入れられるものだけを受け入れようとするなどを、近年の生徒たちの特徴として挙げている(小塩,2004,他)。

以上のような指摘の外に、最近の青年には際立つ特徴がある。すなわち、平気で他人を傷つけたり利用するような行動パターンや、自分が傷つくことを恐れ、傷つく可能性のある場面を避け、学校や社会から引きこもる対人恐怖や不登校のような現象が増えている点である(町沢,1998 など)。これらの不登校、対人恐怖症を始めとする現代青年の社会的不適応の問題には、特に彼らの自己愛傾向が強くなってきている点がかかわっていることが指摘されている(小此木・深津・大野,2004 など)。自己愛的な青年の増加の原因として、社会の変化に伴い仲間との交流が少なくなってきたことや、少子化に伴い過保護に育てられる子供が増加してきたことなどが指摘されている(町沢,1998 など)。

(2) 自己愛をめぐる先行研究

成人の先行研究では、自己愛を病理的なものから正常なものまでの連続線上でとらえ、自己顕示的で自己中心的ではあるものの、適応上、比較的健康性の高い「誇大型」と、逆に他者に敏感で引きこもりがちという特徴をもつ、より不適応的な「過敏型」の2つのタイプに分類されている。

小塩(2004,他)は自己愛を自己愛人格目録短縮版(以下、NPI-S と略す)で測定し、大学生の自己愛傾向を、自己愛全体の高低と、自己主張性または注目・賞賛欲求のいずれが高いかによって4群に分類した。特に自己愛傾向が全体的に高い者の中で、自己主張性を示す「誇大型」と注目・賞賛欲求の高い「過敏型」の2つのタイプが分けられた。

しかし青年期前期の中学生を対象にして、NPI-S だけを用いて自己愛を類型化したものは見当たらない。

2 目的

本研究では、現代の青年が抱える諸問題に関する自己愛を適応の観点から検討することとした。具体的には中学3年生を対象とし、NPI-S を用いて彼らの自己愛傾向を分類し、適応の観点からそれらの自己愛の健康的な側面と不健康な側面について検討した。自己愛のタイプによる精神的な健康度の違いを調べるため、感覚次元自己受容尺度、日本版 GHQ 精神健康調査票短縮 28 項目版(以下、GHQ と略す)及び自尊感情尺度を実施し、自己愛傾向との関係を検討した。先行研究の大学生と同様に中学生でも、自己愛全体の高低と自己主張性 注目・賞賛欲求により自己愛は4分類されると考えた。特に2つの自己愛高群のうち自己主張性の強い「誇大型」は健康な傾向を示し、注目・賞賛欲求の強い「過敏型」は不健康な傾向を示すと予想した。

研究の方法

1 調査対象、および調査時期

調査は東京都内の公立中学校3校の3年生8学級250名(男子130名、女子120名)を対象に、2007年7月上旬から中旬に実施した。質問紙はフェイスシート及び4尺度を以下の順番で構成した。

2 質問紙の構成

(1) NPI-S

自己愛傾向を測定する尺度として、小塩(2004,他)によって作成された30項目を5件法で実施した。

(2) 感覚次元自己受容尺度

伊藤(1991)は自己受容を「ありのままの自己を歪めることなく認識し、自分自身として受け入れ好きになること」と定義し、評価的側面と感覚的側面の2次元的な視座から自己受容尺度を作成した。自己受容は自己の評価的側面の高低にかかわらずすべてを受け容れることであると考え、感覚次元自己受容尺度を採用した。調査協力校から家庭環境の考慮が必要であるとの指摘を受け、父親と母親の表現の2項目を親(保護者)として1項目にまとめ、30項目を5件法で実施した。

(3) GHQ

中川・大坊(1985)によるGHQ(4下位尺度28項目)である。4下位尺度のうち1つ(うつ傾向)は自殺企画に関する項目で構成されている。調査協力校から、対象者の年齢と地域性を配慮する必要があるとの指摘を受け、7項目のうち4項目を除いて実施した。回答は不健康であるほど得点が高くなるように0点から3点を与えるLikert法で得点化した。

(4) 自尊感情尺度

Rosenberg(1965)により作成された自尊感情尺度の10項目を、山本・松井・山成(1982)が邦訳したもので、5件法で実施した。

研究の結果

1 各測定尺度の検討

有効回答数230名(男子120名、女子110名)のデータを分析対象とした。NPI-Sの得点については、男子・女子における結果の差はなかった。

2 自己愛傾向の類型化

小塩(2004,他)の手続きに従い、NPI-Sの4つの下位尺度を主成分分析したところ、自分を愛し大切に思い、価値あるものと思いたいという欲求である自己愛傾向が全体的に高い者と低い者に分けられ、それぞれの中でさらに、他者からの評価を気にし、他者に良く思われることを重視しながら対人関係を持つ傾向を示す「注目賞賛欲求」及び他人と比較して勝っていると感じたときに生まれる不安定な感情である「優越感」が優位な者(以下、注目優位群と略す)と、他者の評価にとらわれることなく対人関係を積極的にもつ傾向を示す「自己主張性」及び他人と比較することなく生まれる自分の能力に対する信頼感である「有能感」が優位な者(以下、主張優位群と略す)に分類できた。

3 自己愛傾向と適応の関連

NPI-Sは全体並びに4つの下位尺度の得点が高いほ

ど、感覚次元自己受容尺度と自尊感情尺度の得点が高く、GHQの得点は低かった。NPI-Sと性別による分析の結果、ほとんどの適応指標で自己愛傾向が高い者ほど適応が高かった。

さらにGHQと自尊感情の一部では、全体的に自己愛傾向が高い者の中で主張優位群の方が注目優位群よりも適応が高かった。

考察

1 自己愛傾向の類型化

本研究の中学生では、NPI-Sは成人では1つにまとまる「有能感・優越感」因子が2つに分かれた。自己の成長段階にある中学生では、他人と比較することなく生まれる自分の能力に対する信頼感(有能感)と、他人と比較して勝っていると感じたときに生まれる不安定な感情(優越感)が分かれている。それが年齢とともに次第に他者に影響されずに自己につながる肯定的な感覚を維持できるようになり、やがて優越感と有能感は統合されていくものと考えられる。

2 自己愛傾向と適応の関連

本研究で使用した適応を測るための3尺度は、一貫して自己愛傾向が全体的に高い者の方が低い者よりも適応が良かった。このことから、自己愛は必ずしも悪影響を及ぼすだけではなく、適応のためにはある程度必要なものと考えられる。

一方中学生では、成人対象の研究とは違った結果になった。すなわち自尊感情総合得点と自己価値肯定感得点を除いて3尺度ともに成人と同様の注目優位か主張優位かによる適応の違いは明確に認められなかった。また、GHQと自尊感情では、自己愛傾向が全体的に高い群の中で主張高群の方が注目高群よりも適応が良いことを示した。しかし、この結果も適応の一部の下位尺度に限定されたものであった。以上の結果から、中学生の自己愛傾向は、全体的に高揚し始めたばかりで、自己主張性(誇大型)と注目賞賛欲求(過敏型)次元の健康性の違いは成人ほど分化していないと推察する。

3 今後の課題

自己愛の高さやタイプが学校、家庭や社会への適応を左右するのか、逆に適応が自己愛を左右するのかの因果関係の検討が課題である。また、青年期前期対象の自己愛研究は少ない。今後は、青年期前期の異なる年齢集団に対する自己愛傾向による類型化の試みや発達の検討が必要である。